

1920年(大正9年)[25歳]

「小池政美日誌」(北京への路)

――1920年5月2日～12月24日――

小池政美

○1920年5月2日(日)

夜、藤井先生の祈祷会に出る。

「お父様、日曜なるままに今日もよき事をうかがい、よき事を見ましたにも拘らず、又悪しき事を見ざるを得ませんでした。凡てが悪しきに働き相になるのが悲しう御座います。殊に自分自身はクロス(十字架)をいぎ背負います時、実は既に凡てをキリストが背負つて下さいました事に気がつきますが、共に悩むとはいえ、年若き人の苦しむを目のあたり見ましては、唯々お祈りする外にどうしてあげてよろしいか判らなく、ただ涙のみで御座います。其の年若き人々も、いざというときには人間の側の浅き信頼を問題とせず、大いなる御力のままに奮然と立つて悪魔を退けて進を見ますとき、お祈りは全く感謝に変わります。お父様、何時も何時もお願を聞いて下さつて有難う御座います。尊き御名に於いてこの感謝をうけ入れ給え、アーメン。」

美しき空が見たかった。さくやのような星が……。

○1920年8月から10月の間の某日(日付不詳)

「大蔵省の」永い間の『調査月報』(作製)の戦も感謝の中に成功の中に終り、又新しき生活に重任を負つて入らんとして悦び限りなからんとするが、かくの如きは又僕に特に賜われる悦びといわざるを得ない。

小さき罪深きこの僕に賜われる御恩恵の深さよ。深きこそは、御意の、御恩恵の、深きこそは、人の罪の根底を知らしめ、之を埋めて下さるものである。

「エス様、エス様、今も我が側に在り給いて、小さきものの為に祈つてこの御恩恵を与え給えるエス様、お父様の御名をあげ、世のサタンと戦い、愛のために、義のために苦しまんとし、聖のために、純のために、凡てを犠牲にせんとする者のために、特別に深き御恩恵を与え給え。否、小なる者は、既に賜われる御恩恵を以て溢れて居ります。

……を通していただける御恩恵こそ僕の一生の花であります。

エス様、御心をなすとぐる力を与え給え。アーメン。」



○1920年11月8日(月)

……「基督教」書類会社で、ギリシア語の「新約」を購^{もと}める。……9時のお祈り。ヨハネ伝第21章。

〔註 この日、兄は北京日本公使館、財務官付の辞令を受けた。〕

○1920年11月9日(火)

藤井先生宅でお昼を。

〔註 多忙のため日記は断片的走り書き。北京へ旅立つに当たり、藤井先生をお訪ねして、祈っていた楽しきひと時をすごしたのである。〕

○1920年11月11日(木)

本当にクリーン・ライフを送って参ります……。

〔註 藤井先生と信仰の友人に向かつての言葉である。〕

○1920年11月12日(金)

遂々、出発の日が来た。「午後」5時20分、東京駅発。此の次、皆様にお目にかかる時には。

……

〔註 31年前のあの日が、なお私の眼底にその映像をとどめている。昇降台に立つて無限の慕かしさを湛えつつ去りゆきし兄の瞳！ あの瞬間が今生の生別となった。当時、基督者として家族親戚の間に全く孤独であった兄の心胸は、今沁み沁みと察せられる。〕

○1920年11月13日(土)

……苦情は申上ぐべきではないのでありましょう。My Grace is sufficient for thee.

〔註 「わが恩恵汝に足れり」コリント後書12・9。嫌がる所へも無理に迫りやり給うとのパウロの辞。〕

是れを我らの信仰として参りましょう。

〔註 兄は本当はロンドンへ赴任するはずであった。それが、ある横槍のため、北京に変わったのである。日記の調子は屢々、人に語る如く書かれてある。手紙の如くでさえある。それは彼が信頼していた霊的な母、高島鴻子氏に対して語りかけている場合が多い。同氏については藤井武全集第12巻「美しき印象を私に残した人々」を参照されたい。〕

○1920年11月14日(日)(西下途上、沼津の旅館にて)

朝のお祈りに「海岸へ」出かける。

午前は“Resurrection of Christ”(「キリストの復活」)と“Hypothesis of Vision”(「先見の仮



説」?)との見返しに忙しい。

〔註 ゴーデーの名著の翻訳を始めていたのである。〕

午後は“Divinity of Jesus Christ”(「イエス・キリストの神性」?)に忙しい。2時から7時までかかって漸く出来た。〔翻訳のこと〕。

“Go thou and make it the work of your life to turn this magnificent possibility into a grand and eternal reality. Receive your Pentecost, and you shall get your ascension.”

ゴーデー先生、行つて参ります。

この偉大なる可能を久遠の現実とせんがために。

聖霊の降臨を受けて天上に揚げられんがために。

……9時10分、下関急行。〔沼津発車〕。

〔註 ゴーデーのこの迫力ある言葉は、これを日記に抜き書きした兄にとって、正に預言となり、一年経たぬうちに、兄は天上を現実界とする身と化したのである。噫！人生の神秘、冥合。下関急行は、そのまま天国ゆきの急行列車となり、兄を運び去ったのである。〕

○1920年11月15日(月)

午後3時に粟屋に。

〔宿命的な広島駅プラット・フォームに信仰の親友、粟屋仙吉氏の出迎えを受けたのである。二人は、今天上で何を語り合つて居るだろう。〕

○1920年11月16日(火)

既に一年にもなりにける哉。昨年の今日は日曜であつた。大手町〔内村鑑三先生の日曜集会〕からの帰りを大学の森に祈りしを忘れ得ない。

特別に厳肅に暮らさねばならぬ此の一週間を、神様何卒守り給え。

「我れ一つのことをエホバに乞う……」(詩篇27・4)

Curfew(晩鐘)を静かなる夕に、大海原の真只中に迎えて祈り奉る。

〔註 「晩鐘」「夕の祈り」のこと。兄は朝9時、夕4時、夜9時を祈りの時として遵るをつねとしていた。特に夜の9時は欠かさなかつた。そして聖書を幾頁か読まぬ日はなかつた。そのことは当時、未信者であつた私の心にも深い印象を遺した〕

「ダビデと共に〔とは上掲引用の詩篇第27篇全体の心に因んでのこと〕、お父様、御心のままなる一年、二年を過ぎしめ給え。何事もあなたの御意思に出で御心のままに、と信ずる以上、世の人は何と批評しましょうとも、身内と親類と友人とは何と見ましようとも、何卒、神様、行くべき道を正しく雄々しく歩ましめ給え。」

When my father and my mather forsake me, then my Lord will tske me



up. (Ps.27:10)

オリオンと双子とを右舷に、宵の明星を左舷にして釜山の港に入る。夜9時半釜山着。11時北上。寝台は日本より遙かに上等。

○1920年11月17日（水）

眼は水原で醒める。水原の畔、僅かに緑を見るのみ。満目荒涼たる朝鮮。……夜9時すぎ安東着。時計を一時間おくらせる。

○1920年11月18日（木）

6時半、奉天入り。乾燥した秋の空気の心地よさ。10時40分奉天発。広い広い高粱畑こうりやんの中をひたすらに南西へ。山海関の手前で夜に入る。「天下第一関」の文字は見えず。18日よ、18日よ。

〔註 一年前のこの日を想い出しての言葉である。1919年11月18日は、兄がある十字架を負わされた日である。〕

○1920年11月19日（金）

10時20分、よき年月を与え給えと願いつつ、北京に入る。東京を出てより5日を以て目的地に着いた。

何という汚い土地であろう。思い設けし事、悉く忘れ去って、眼前の汚さのみが目につく。僕の室も北京の一室たるに恥じない。

○1920年11月20日（土）

……凡てを御心のままに委ねて、涙の中に御名を讃えし日よ〔一年前〕。久遠の御光、今日の上にあれ。

思い設けぬ事の次々に出で来たりぬとはいうものの父の御心の大計画を一分も曲いぢぶぐるに足るものは一つとしてなかったのである。御名を讃うるに、共に声を高うする者なきを憾うらまんのみ。

○1920年11月21日（日）

……ランプを買いに出かける。……
聖なるものは決して人にはない。只尊き清き彼〔キリスト〕に於いてのみある。

○1920年11月27日（土）

土曜日である。中渋谷から東中野への道が思い出される。……涙は祈りとなり、歓びの



歌となりゆくのである。御恵みに活くる者は久遠に強き哉。清き哉。

……おせっかいな世の人よ。退け。僕には僕の輝く道がある。善意にせよ、悪意にせよ、諸君は僕の此の道に一步も踏み込む事はならない。

〔註 早くも結婚問題を持ち出す連中を退けたのである。その後、兄はやがて準備の成りし暁には支那で伝道し、骨を埋むる覚悟をした。支那人、アフリカ土人を愛したゴールドン將軍やリヴィングストーンに傾倒していた。〕

聖なる夜よ、我を潔め給え。アーメン。

○1920年12月1日(水)

公使館へ行く。……はなかなかしつかりした人、頼もしく見えた。併し頼もしく見える見えないは彼の価値を決するものではない。神に頼れる人間なりや否や。そのみが凡てを決定するのである。

○1920年12月4日(土)

龍ちゃん(弟、龍二、私にとっては次兄)に電報を打つ。

「今日凱旋と聞き、喜びに堪えず、遙かに健康を祝す」と。

〔註 次兄は当時、シベリヤに出征中であつた。〕

○1920年12月5日(日)

雪である。……お父様とエス様とは知って居られる。……清き雪を見たくて城壁へ行く。丁度 British Legation Chapel の前に行ったら4時が聞こえて来た。よき Curfew である。天文台まで歩く。

夜、"Studies of the Old Testament" にかかる。[ゴードー著『旧約聖書の研究』のこと]

○1920年12月7日(火)

陸軍省の横暴。つくづくと考えさせられる。

○1920年12月12日(日)

『旧約と新約』有難い。[藤井武先生の月刊誌の落手したこと]

○1920年12月24日(金)

……金もなく、クリスマス・トリートの美しさもなく、青い電気を灯して、一人でよき宵を迎える。



〔付記 読者には関わりなき内容で相済まぬ次第でありましたが、“Thy will be done!”を祈りとして信頼の一途を走りぬいた青年の片影です。天上で今も活発に生きている彼であると信じています。ただ聖名を讃えて下さい。

1919年という年が、兄にとつて最も重大な意義を齎した年でありましたが、ここに抜き書きしたのは、その前後の1918年と1920年とでした。

1921年9月某日、召天の少し前に、彼は主イエス・キリストが輝ける白き衣を着て迎えに來られた幻影に接し、歓喜したことを、茲に一言付記せざるを得ません。――
編者 辰雄〕

〔文庫編集者註：以上「北京への路」(1920年5月2日～12月24日は、「曠野の愛」誌第9、10号(1951年12月中旬発行)からの転載)

*

1921年(大正10年)〔26歳〕

「北京からの手紙」(政美より辰雄へ) 他

——1920年12月～1921年7月——

○1920年12月10日

〔第一信〕

辰さん

丈夫？ 試験はどうだった？ 僕の出発などの為にどんなにか勉強の邪魔をした事かとお気の毒に思います。

忙しかったため——何と言っても家一軒を設立し且つ之を維持する大事業である為。おととい、明日は辰さんに書くつもりと申しつつ、昨日書けなかったのは役所の不意の仕事が出来たため、御免なさい。

いよいよ高等学校の時間割も出てね。

歴史、地理、化学とは完全に暗記もののね。計画を立てて実さんの考を加えてしつかりやって下さい。……おちついておやり。化学から始めた方がよくはないかしら。……念を入れてやればよろしいね。

学校は何処に定めて。

一高ではあぶないと思うならそれも致方ありません。僕なら二高か水戸かを選



ぶ。

就ては母様の御意見をよく伺うように、怖がっちゃ駄目。相手は四年坊子だと言う事を忘れずにね。

僕は丈夫。

12月1日、公使館から帰って来てとった写真お目にかけます。(右眼――義眼、左足――びっこ)

大正9年(1920年)12月10日

辰雄様

○1921年1月5日

〔第二信〕

辰さん

勉強の具合は如何。

ここがふんばり所。五年間の勉強を美事にくくって御覧。尾田先生のお世話になつて居る相、びしつとして戴くには何よりと僕は大喜び。

僕は自分の勉強のための時間がなくて可成り閉口です。この間行つた万寿山の写真お目にかけます。清の西太后が一年の海軍費をまげて作つた離宮です。

それから万里の長城の一枚。

しつかりやつてみんなを喜ばせて下さい。

御機嫌よう。

大正10年(1921年)1月5日

政美

辰雄様

○1921年1月23日

〔第三信〕

拝啓

18日付お葉書今日拝見、漸く辰さんの状況判明、^{ようや}辰さんの事は矢張り辰さんが書いてくれなくては明瞭には判らざるものに候。^{そうろう}高等学校の作戦それにて結構と存じ候。此の上とも万事実さん或は尾田先生に御相談の上、決定す可く、学校に於ける風評即ち同級生間の説に耳を傾くる事は全然御無用と存じ候。少なくとも之に辰さんのみにて直接に独断に批評を下し其れに従つて行動する事はお慎み^{たく}下されたく、至当と考えらるる事も一応皆様の御意見伺いてからの事となされ度候。

数学の準備のため時間不足云々の件は、僕には聊か不明。時間の不足は熱心を以て、注意の集中を以て補わるることこそ至当と存候。

実さんも尾田先生も必要なる時間丈見て下さる訳に有之可く、優れたる指導者がある間は信じて凡てを委ぬるが弟子の道であり、又男の雄々しきに有之候。自ら走り出すのみ計画致すのみが勇氣には有之候わず。やがて欲しくとも指導者なき時も参り候う可し。其の時こそ万事熟慮の上御自身御決行の時に御座候。高等学校がその時代に御座候。今は母上様を始め皆々様の御指導專一に戴くが何よりの時に候。

試験もあと二ヶ月に相成候、計画なりたる後は只実力の問題に御座候、五年前の辰さんの勉強思い出だされ候、今度もしつかり願上候。

大正10年(1921年) 1月23日

忽々

政美

辰雄様

○1921年5月21日

〔第四信〕

5月9日付お手紙拝見して考えている中に病氣になってしまいました。驚かして申訳なく又お返事が遅れて申訳ありません。

僕は、それだけ考えてのことなら「……」プランのままに一生懸命つとめる事に賛成します。何卒しつかりやって下さい。

病みあがりなのと暑いのとで今日は疲れていますからこれで。

大正10年(1921年) 5月21日

政美

辰雄様

○1921年5月29日

〔第五信〕

前略。

母様のお手紙で日土に試験のあったこと、「……」承知しました。幾何が満点がとれるなら代数でもとれぬ訳はないと僕は思う。「……」7月の学期が終るまでにもっともつと千足の進歩を見るように、万全の努力を惜しまずにね。

身体は丈夫でしょうね。僕ももう大丈夫。

忽々



大正10年(1921年) 5月29日

辰雄様

政美

○1921年7月6日

〔最後の書翰〕

拝復。

一日お手紙拝見、元気で大喜びに御座候。

水泳部と沓掛^{くつかけ}との計画は結構に御座候が、母上様は如何になさるや。沓掛には母上様もおいでになるや、それとも何処か他の所にどなたかとおいでにや、おきまり次第お知らせ下され度候。龍ちゃんが土曜日曜の休みに伺い得る程の土地を選び下さらば、僕も嬉しく有之候。

当地は既に役所は午前だけ、午後は一番あつき盛りを午睡、夕方自室にて役所の事など見、夜と早朝とを自分の時間とし、勉強致し居り候。

身体至つて健康、但し中法銀行閉行の結果、同銀行券流通致さず、40円程もつて居り、それが所持金の現在は半以上に達し居る事とて少々妙な心地に有之候。但し支那政府が救護するらしく遠からずして解決つくは申すまでも無き事に候。

時下御自愛願上候。

海が目の前に見ゆる心地致し候。

敬具

大正10年(1921年) 7月6日

政美

辰雄様

*

○1921年10月9日

電報二信(大正10年9月のこと)

「才危^{キトク}篤^{ヨシ}ノ由、タダ^{イノ}祈リニ」

高島鴻子

「再^マタ会^アフ日^ヒマデ御忍耐^{ミシノビ}ヲ願^{ネガ}フ」

藤井武

〔前者は小池みつ子宛、後者は小池政美遺族宛。言うまでもなく前者は死の直前、後者は死の直後に拝受したものである。両発信者も、既にパラダイスに往つてしまわれた。天は賑わい、地は寂しい。けれども残されたる者には戦の義務がある。祈りと忍耐を以て再会の日まで！

——編者 小池辰雄〕

〔文庫編集者註：〕

高島鴻子	1874年12月15日	1924年8月2日	50歳
藤井武	1888年1月15日	1930年7月14日	42歳
小池政美	1895年7月15日	1921年9月22日	26歳〔

*

「樅の書翰」

——兄 政美に就いて——

1933年9月22日

小池辰雄

“I imparted my mystery to none, but wandered to and fro, or sat in solitude, like one that had caught a glimpse of heaven and could take no more joy on earth.”

——from “The Vision of the Fountain”

〔註（直訳）：「私は誰にも私の神秘を伝えませんでした、あちこちと散歩したり、天国を垣間見て地球上でこれ以上の喜びを味わうことができないような人のように、独り坐っていたりしました。」——「噴水のビジョン」〔ナサナエル・ホーソーン著〕より〕

かくも濃やかなる愛の人がかくも速やかに地を去らねばならなかったことが、私には解らない。けれども、ハッキリ解る。イエスは何か天にもの書き給う！

——僕の勉強のため——

大正9年（1920年）11月半、支那北京に赴任した長兄（政美）の心は繁忙の生活の中にも弟の受験の事を夢忘ることが出来なかった。弟なる私は兄の祈りと激励と期待に反して翌年の春の入学試験に破れた。しかし私にとっては、敗戦は当然の帰結であり、偶然に入学するより結局幸であることを自己弁護としてでなく自覚した。受験準備の一年を最



も賢明に費やすべく私は決意した。その一年の勉強は火の出るようであった。兄を失望させて悲しくまた辛くあつた私は、こんどこそは見事に勝つて喜ばせんもの^{のぞ}をと希^{ねが}んでいた。然るに、突如兄は腸チフスの難病に罹り三週の中に此の世に別れを告げてしまった。時は今から満12年前のこの月22日〔1921年9月22日〕である。同心町の家は柱石を折られて保つことが出来なかった。悲しみは哀しみを呼んだ。母の失明！ 悲嘆と草々の中に二ヶ月は経った。晩秋より私の戦闘準備は暗黒の空の下に白熱化した。

「石にかじりついても一高に入る！」

それが私のモットーであった。

明くれば1922年（大正11年）、期近づきて私は一高の受験票を求めた。第二志望として水高のも求めた。私自身は勿論一高を受けるつもりで居た。然るに周囲の人々の声は「一高を」とは言わないのである。身体のためと失明の母のもとを離れた方がよからうと言う心づかいと、一高を失敗してはと云う懸念のもとに。それらの声に抗してまでも一高を受けることは私のなし得るところでなかった。しかし！ 私があのときどれほど残念であつたか、ひとり暗涙に咽んだかを、見えざる方が知り給う。心向かざる地水戸へ！ それはつらき首門であつた。勿論私は全力を尽くして戦つた。余りにも自信ある戦であつた。

“VENI VIDI VICI” (I came, I saw, I conquered.)

であつた。入学は余りにも当然であつた。一年前と一年後！ 何たる相違を自らに見たか。成績の上から大丈夫一高に入れたのであつた。あの入学試験のときの様な成績をかつて勝ち得たことがない。多分5番であつた（或いは4番）。当時の私としては、兄が死んでこのことを報せ得ず、従つて兄を喜ばせ得ざりしを如何ばかり悲しく思つたか。高校の帽子を冠つて墓を詣で私は泣いた。私にとつてはどうしても一高に入らなかつたことが口惜^{くや}しかった。況んや水高受験の後で慶応を受けさせられたときにも優^まして所謂癪にさわつたことはなかつたと云つてもよいかも知れぬ。

斯くて会稽^{かいけい}の恥^{すず}を雪いだが、兄は在世中私の勉強如何を心配したままで終つた。その兄らしき心づかいがここに遺^{のこ}されている手紙に読まれる。手紙のみでない。兄は臨終の床で僕を見舞いに來たもの^{もの}と思ひ―― 勿論高熱のため――

「辰さんは早く帰つて勉強するように！」

と云うような言を口走つた由。かくまで兄を憂いしめた罪は深い。そしてこの兄の言は、兄のいのりの心は終生私を励まし力づけてくれるであろう。

勉強！ それは私の生涯の義務であり、喜悅である。神様が、天国で兄や藤井先生に私がお会いするとき、この者はよく勉強したと保証して下さいるにまして私の喜びはないであろう。それに価する者とならんため、いのりつつ励もう。

*

――辰雄 1933年9月半



(参考)

「藤井武先生と小池政美」

小池辰雄

藤井先生と私の兄との関係がいつ如何ようにして始まったかは、先生の「美しき印象を私に残した人々」の一文で始めて知ったに過ぎない。私は藤井先生には『基督の復活』の校正のお手伝いで始めてお目にかかり、やがて私自身が弟子となり、先生の死に至るまで完全に信仰上の御恩を蒙ったのである（『藤井武君の面影』中の拙文「恩寵の跡」及び「憶藤井武先生」参照）。

先生は時折、兄について感慨深い言葉を私に洩らされた。

「小池君、君がこんなに速く信仰に入って兄さんはどんなに喜んで居られるでしょう。……君の兄さん、政美君はね、一人に一人居るか居ないかの人でしたよ。……小池君の兄さんにしかないものがあつたのです。……それは言葉には言えないピュア（純）な、深いものでした……」

先生のこのお言葉の下で私の胸は熱くなり、私の眼はうるおうた。此の語られたある秋の午後のひと時を私はいつまでも忘れることが出来ない。

兄の召天の翌月、先生は『旧約と新約』誌第17号「慕う所は天にあり」に於てヘブル書第11章の解説をなし「信仰の本領」と「旧約時代信仰史大観」を展開した後に「信仰に由て彼も亦」と題して、兄を「信仰の証者」の群に数え、天の万軍の一員と見て下さった。先生の文に曰く、

「信仰に由て彼も亦」

「ホウソウノウタガヒ、一七ヒツケオヤキクダサイ、ゴヨウハマダマダ」。

今年春彼が突然天然痘類似の重き病に罹りし時、任地北京より余に寄せたる第一信は之であつた。彼は病毒の伝播を氣遣うて、其数日前余宛に発送したる書翰の焼却を要求したのである。而して自己に就ては、主の御用の尚甚だ多きを指摘して、以て信仰的平安を伝えたのである。……

程なく彼は癒された。我等は深く感謝した。相変らざる激務に当りながら純乎たる信と愛と望との生活が続けつつある彼を思う事は、我等の大なる福いであつた。然るに八月末再び重き病が彼を犯した。今度は悪性チブスである。彼が北京の病院よりその親しき友に宛てし電報には

「ゲイカヨシ、クルシミトウタガヒニハクロス（十字架）アフギテ」

とあつた。母君は東京より馳せつけて看護に力められた。我等はただ心より祈った。しかし病は篤かつた。母君に向かつて彼は曰つた、



「母様、僕は早く主に御目にかかりとう御座います。母様どうぞ御許し下さい」
と。九月二二日、彼は遂に召されて主のもとに往いた。

噫、わが友小池政美。大学を出でて三年に充たざる彼の地上の生涯は余りに短くあった。しかし彼も亦古の人の如く信仰に由て神と共に歩んだ。誠に美しき生と死であった。感謝！―（1921年10月）

兄は主としてデリッチやゴーデーの聖書註解書類（英訳）を手引きに聖書の勉強をしていたが、ゴーデーの名著の翻訳に、北京赴任の直前から着手していた。彼が地を去ったあとで、藤井先生は、それを惜しまれて、自費出版を企てて下さった。深い熱い友情である。その『基督の復活』と題する訳書の「序」に次の如く、先生は書かれた。

「基督教は譬えば花である。貴き輪廊と色彩とのほかに、なお独特の芳香がある。然るに現在ひろく我国に伝われる米国風の基督教にはその原始の花香が殆ど失せて居る事を私は悼む。近代の聖書学者中私の知れる限りに於て最も基督教らしき香を備えたものの一人はゴーデー先生であった。先生の信仰は単純にしてしかも深く、火の如く燃えてしかも冷静に、預言者の如く大観的にしてしかも学者の如く研究的であった。その多くの著書のうち殊に二、三のものは実に不朽の名著であると信ずる。

小池政美君は稀に見る純なる人格であった。私が君と識ったのは僅かに君の地上に於ける生涯の最後の二年間に過ぎない。しかし私に取ってその記憶は永久的である。

君の人格には或る意味に於てイエスの香いがあった。ガリラヤ湖又は橄欖山の如き背景に適わしきものであった。君は東京帝国大学法科を卒業した後、大蔵省事務官として北京に駐屯し、此世との悪闘、信仰のための善戦を続けつつ、若くして召されて世を去った。今より三年前の事である。

本書はその悪闘の中にありて成就せられし君が祈りの結晶である。……（1924年4月）

なおまた、先生の月刊誌『旧約と新約』第47号の新刊紹介文の中には、

「訳者小池政美君の如き純なる心の持主を私は多く知りません。君の信仰はゴーデー型でありました。研究を重んじながら、主に対する思慕の情を以て燃えていました。米国風ならぬ日本的基督教者の典型として私は君を紹介したくあります。本書は君が劇務の間に此世と闘いながら成就した貴き信仰生活の産物であります。」

と記して下さい。

*

兄は多読強記の人であった。兄は日本文を綴るより英文を書く方が達者であったから、外交官になるかと人々は思っていたと言う。筆はまめで、すらすらと毛筆でよく手紙を書いた。藤井先生のお二階で、ある日先生が私に、

「政美君からの手紙がこんなにあるんですよ」



といて見せてくださった。勿論その時、手紙を読ませてはいただかなかったが、そのうちに先生御自身が天国に旅だたれてしまった。同じく今は天上に在る洋君にいつかその手紙をそっくり戴きたいと思っているうちに、空襲のため先生のあの懐^{なつ}かしい家が全焼してしまい、兄の手紙もすっかり天上に煙とたちのぼり、ここに移記すべき一句もない。先生から兄にお書き下さったお手紙が相当あったに相違ないのであるが、兄の病が伝染病であつたために、北京の地でその他一切の手紙と共に焼かれてしまったことは何とも惜しき限りなのである。

*

『旧約と新約』第58号、1925年4月号に先生は「美しき印象を私に残した人々」と題して四人の友人のことを書かれた。その一が小出義彦兄、その二が舎兄、その三が望月すみ子女史、その四が高島鴻子夫人である。左に兄のくだりの大半を転記することをゆるして戴こう。

「大手町衛生会講堂に内村先生のお手伝いをしていた時分、或る秋の日の集会はてて、講堂前の広小路にまだ散りやらぬ会衆の群に交つて、私も二三の友人と語っていた。その時ひとりの青年紳士が私に近づいて挨拶し、一つの事を私に求めた。それは今後私の自宅集会の出席を承認せん事であつた。初対面ではあつたが、私はその端嚴なまなざしに強い印象を受けた。次の土曜の晩から、この君は欠かさず我らの集りに出席した。其年の春に東京帝国大学を卒業して、当時大蔵省に勤務していた小池政美君がその人であつた。

不思議に君は最初から我ら夫妻の信頼を喚^よび起こした……。

翌年の冬になり、君は支那駐在財務官附としてかの地に転任した。私は始めに気付かなかつたが、君をかような土地のかような社会に遣^やる事は、たとえば羊を狼の中へ入れるようなものであつた。そこには肉の慾、眼の慾、所有の誇にみちた、しかも内地には見られぬ程^{すさ}荒んだ心の人たちが、恥^はずる事を知らぬ浅ましい日々を送っていた。

「僕の想像し得る悪という悪が、又罪という罪が、此所には最も簡単に手輕に、又個人的利害關係から来る非難を除いては、社会的には無非難に行われて居ります」

「……選^えびに選^えんでどうしてこんな所に神様は僕を投げ込んで下さつたのかと思ひますと……僕^なだけは何卒^{なんにとぞ}とお祈り致して居ります。」

勿論君ひとりを陥れよとする誘惑の網^{わな}も多く張られた。

そついう中であつて、君は雄々しくもイエスと共に歩んだ。小兒のような信頼深さをもつて君はイエスに絶^すつた。君の祈りこそは祈りらしき祈りであつた。「お父様」と呼んで神にせまる時の虔^{つつし}ましくして親しげなるさまはまことに神の子にふさわしいものであつた。君が我らのために祈ると言い送ってくれる時には、我らは眞実にその力を感じた。どんなに忙しくとも聖書を読まずに過ごす日は君には一日もなかつた。



「盧山滞在の日は、昨年東京を立ちます日に第23を読みました詩が丁度第121になりました。」

「昨日からゴデーに就いて羅馬書に入りました。」

その外になお君は「夜昼の区別もなく殺倒して来る世の仕事」の間に、苦心してゴデーの名著の翻訳をつづけた。その原稿には各篇の稿が終るごとに、簡単なしかし意味ふかい感謝の言葉が添えられてあった。学者が書斎に筆を執るとはちがつて、多くの犠牲の払われた貴い労作の果であった。かくて異境の穢れた日本人社会に少くとも一人の靈魂のみは潔く保たれた。

君がかの地で重い熱病にかかった時、私の見舞にこたえて寄せた電報は次のようにあった。

「カホトムネコホリズムナレドカレノアイハサラニアツシ」

それは最初の二人の医者かともに天然痘と誤診した Daks disease とかいふ病気であった。顔から胸まで氷ずめにするほど熱は高くあった。しかしさういう苦痛の中にあつても「彼の愛は更に熱し」と君はいふ。この言葉を病床から看護婦または友人に口授して居る福なる君を想像して、我々は喜びに溢れ心から感謝した。

君は或る意味に於て悲哀の人であった。君の信仰はただ感謝々と叫んでよろこび躍るやうなたちのものではなかった。君にはいつも深みがあった。しかし又深みの中に言いがたい豊かさがあった。君の病気がまだ十分に癒えず、時々高い熱に苦しんでゐた頃のたよりに、次のやうな一節があった。

「この間花屋へ行きましたら、いい薔薇がありました、少し僕には贅沢と考えながら、ほしさに取って参りましたものが、十ほど花を開いて二間程かなたから床しい香を送ってくれます、まだ五十ほどの薔が、病気が長びいても平気なとばかり申します。」

君の人格を背景にして之を読んだ時に、私は何となくナルドの香油をイエスの足にぬつてその香りを家に満たしたマリヤを連想した。勿論此の場合に於ける君の薔薇に特別の意味があるからではない。両者の人格そのものに似かようふしがあるからである。

君も亦聖国にあこがる人であった。しかし若し先の小出君の信仰が特に希望の信仰であつたとするならば、君のは特に貞潔のそれであつたと言いたい。小出君が今の滔々たる現世主義を踏まえてレバノンの香柏の如く天を指したやうに、君は近代の腐敗しきつた情性を遙かに見下して、曙の明星のごとく輝いた。

君の召された後に、母堂と令弟とは遂にイエスをあおぐ生活に入られた。一粒の麦まず地に落ちて実をむすびつつある事を私は深く感謝する。

（著6巻『随想集』416頁から転載）
私がここに兄の想い出を書くことはさしひかえる。次に彼の日誌の一片を通して彼の心



魂と共に新たに主の聖名を讃えたいとおもう。

〔文庫編集者註…この文章の次に、前出の「クリスマス前後」「北京への路」の日記がつづく。
なお、「小池辰雄日記」の中から「高島鴻子伯母様」の召天にかかわる記事をつぎに抜粋する。〕

○1924年8月3日（日）

晴。起床6時。冷水摩擦。散歩。祈祷。聖書、ローマ書。書簡。今日はかなり暑い。温泉を浴びずに清水を浴びた。ブランコ。海や湖が懐かしくある。高島のままだ、如何とのみ案ぜられる。昨夜の夢は何であったか。これ正夢にあらざらんことを。而して之、正夢に非ずとの確信あるなりである。それこの間の夢を思いて之もまた我が心霊の目覚めんだめなり。……

○1924年8月5日（火）

晴暴風。起床5時半。……お昼の御飯のとき葉書が来ていた。この葉書、何の報せぞ。母上より。高島様の伯母様は遂に御許に召されたと。その意外、その突然、私達のお祈りはついに聴かれざりしか。深く主におたずねする。それは聴かれざりし祈りにして、最も聴かれた祈りであったのか我等は知らねども主の御心に誤りなし。神の深き御恵であったのか。

「耐え忍びて汝らの生命を全うせよ」（ルカ伝21・19）

との御言葉をよく遵りて、高島鴻子伯母様は御許へ往かれた。救われたる伯母様、この世の旅路を御心にかないて終わらせられた。ままだ、幸なる哉。ああ美しかりしその御生涯。かの御病気を常にもたれて、つよくしつかり歩まれしままだ。今は御心によりて召された。誠に主はその召し給うときに於て誤り給わざりきと信ずる。ままだは歓喜と感謝と希望に満ちて、いさぎよく天国へ昇られたことと確く信ずる。今は聖国にあつて曩に召されし聖徒等と楽しき面会をして居られるであらう。政美兄上もその一人であらう。御二人は、さぞ永遠の楽しき笑みにつき、み物語をして居られることであらう。

ままだのために、讃美歌456番「かの時には我が知らるる如く我しらん」（現489）、

「清き岸辺に やがてつきて あまつみにに つひにのぼらん

その日かぞへて たまのみかどに とももつからも やがてあはなん

やがてあはなん めでにしものと やがてあはなん。」

を心から歌い奉る。

それから、171番「其子エス・キリストの血すべて罪より我らを潔む」（現515）、

「十字架の血に きよめぬれば 来よこの御声を われはきけり

主よ われは いまぞゆく 十字架の血にて きよめたまへ。」



を歌いまつる。然れども然れども、我が情はまた悲しみの涙に咽ぶ。

地の悲しみと天の歓びと交々、僕の胸裏に湧きて、ついに勝を占むるは、基督者の天の歓びである。然り、時至らば我もまたである。基督の再臨、信者の復活、再会。何たる希望ぞ、何たる歓びぞ、何たる恵ぞ、何たる幸ぞ、何たる平安ぞ、何たる榮ぞ。榮光すべて神に在れ。アーメン。

基督者の死は、死にして死に非ず。天国への門の通過なり。まま様の愛の御生涯の美わしかりしよ。「天に宝つめる者」はまま様にてありき。

前の日記をくつて見る。6月3日のことであつた。母上様と、中渋谷の伯母様のところと藤井先生のところへ行つた。そのときの御はなし。そのときまま様の一挙一動、ありありと目前に浮かぶ。あれがこの世の最後であつた。まま様のお家は道玄坂上であるのに、坂下まで僕達と一緒に来られて、御親切にお送り下されたことを思つては、ただただ涙が浮かぶばかりである。いかなる瞬間にも愛の心が溢れていた。一言一言愛のほとばしりであつた。まま様の御信仰とその愛、純なる基督者。ねがわくはまま様の霊、僕に宿り給いて僕を導き給わんことを。

基督者、兄上の血、岩瀬一民様の血、而してまま様の血、その美しさ、その淨さ、その貴きこと、キリストの枝なる彼等の血にキリストの血あり。熱愛の血なり。皆、僕達のために。僕の祈りは悲しみより感謝へ、歓びへ、希望へとうつつて行つた。……

○1924年8月6日（水）

……「母の頼みまつる主にとくかえれ」の讃美歌を思い、この世の旅路終るまで母上のために献身しなければならぬ。母上は、僕の母上は特別な母上である。非凡なる母上である。その御奮闘を思い見て、どうして安閑として母上に尽くさぬに居れようか。母上は今失明されて居られる。これまた特別な母上である。汝の母上と、亡き兄上と、在ます兄上とをよく思え。

四郎ちゃんから聞くとところに依ると、高島鴻子伯母様は1924年8月2日午前10時35分に召されたとのこと。2日、ああ、僕の夢は正に2日の晩であつたのである。その夢は、ついに正夢、神の御報せであつたのである。何たる不思議ぞ。奇跡は神のなし給うところ、我々の知り能わざるところ。……

